英語圏現代女性文学における老い

社会環境学部 社会環境学科 准教授 原田　寛子

分　野　英語圏文学

キーワード　英語圏文学・エイジング・女性文学

研究概要

研究概要

高齢化が進み「老い」に対する認識を再考する必要がある現代において、老いをどのように受け入れていくかは重要な課題である。人種、階級、ジェンダーに加え、年齢もまた差別を生み出すカテゴリーとして理論化される必要がある。本研究では、どのように「老い」が作られ認識されていくのか、そして、その否定的な要素をどのように覆し、前向きに受容する可能性が示されているのかを文学作品を通じて考察する。

研究対象として英語圏女性文学の作品を取り上げる。社会のなかで、老いによって女性には二重のマージナリティが与えられることは議論されている。女性の価値を美や若さに置く社会的・文化的背景はいまだ根強くあり、女性たちもそのような規範にとらわれている。長寿社会に向けて、高齢女性や老いに対する新しい文化的モデルをフィクションを通じて考察する。

研究方法

・社会的文脈の中で構築される女性の「老い」の表象と問題点を明らかにする。
・文学作品を通じて、老いの肯定的な受容の可能性を以下の点に着目して考察する。
　主体の再構築
　　老いる過程で経験するアイデンティティ・クライシスと自己再構築のプロセス
　共同体における役割
　　家族や女性同士の関係、共同体における老いの役割と意義
　自然との関わり
　　女性、母親、妻という社会的役割を超えた存在として、老いを経験する女性が発する社会や自然への訴え
・文学を通じて提示される老いの前向きな受容が社会においてどのように作用するかを考察する。

対象作家

Margaret Drabble、Doris Lessing、Margaret Atwood、Margaret Laurence、May Sartonなど

利点特徴

・否定的、悲観的に捉えられがちな老いを前向きに捉えることで、老いに対する人々の意識を問い直し、変化させる。それによって高齢化社会との向き合い方を考え直す一助となる。
・物語は単なる作り話ではなく現実世界を反映するものとし、教育の現場や人々の意識改革に役立つ、フィクションに内在する可能性を引き出す。

応用分野

・老いに対する認識の変化は、子供、外国人、障害をもつ人など社会におけるマイノリティや弱者とみなされる者への理解を深めることにつながる。